

他者認識と心の理論が幼児の自己防衛的嘘に及ぼす影響

水口啓吾・近藤 綾・渡辺大介

Influences of the belief in being observed and theory of mind on young children's lying behavior

Keigo Minakuchi, Aya Kondo, and Daisuke Watanabe

本研究では、幼児の自己防衛的嘘における、他者認識と心の理論獲得の影響について検討した。年少児 35 名、年中児 35 名、年長児 38 名を対象とし、実験者不在の際に、箱をのぞいてはいけないと約束したにもかかわらず、のぞいてしまった幼児が嘘をつくかを検討した。その際、他者認識として、カメラ有り条件とカメラ無し条件を設定した。また、心の理論課題を実施して獲得の有無を調べた。その結果、以下の3点が明らかとなった。1) カメラによる他者認識は嘘をつく行為ではなく、“箱の中をのぞく”という自己制御に影響を及ぼした。2) 心の理論を獲得している幼児の方が、未獲得幼児よりも嘘をつく割合が多かった。3) 年長児において、心の理論を獲得した幼児は、カメラ有り条件では“のぞかない”，カメラ無し条件では“嘘をつく”といった状況に応じて異なった行動選択を行った。以上の結果から、幼児期の自己防衛的嘘を含めた一連の行動過程に他者認識と心の理論が関連していることが明らかになった。一方で、状況場面に応じて異なった言動を行うには、心の理論の獲得以外の要因が関連している可能性が示唆された。

キーワード：幼児，嘘，他者認識，心の理論

問題と目的

日常生活において、我々は様々な“嘘”をついている。例えば、本当は宿題をやっていないのに、正直に言うと怒られると思い、“やった”と嘘をつくことがある。また、仲の良い友人から貰ったプレゼントが、本当はあまり嬉しくない場合であっても、正直に言うと相手が傷つくと思い、“すごく嬉しいよ”と嘘をつくこともある。一方で、嘘が嘘として成立しない場合も存在する。例えば、宿題をやっていないことを知っている親に対して、“宿題はやった”と言い、嘘だとすぐにばれてしまうことである。このように、発し手が嘘をつき、それを聞き手に真実であると認識させるためには、“相手が自分のことをどこまで知っているのか”，そして、“このような言動を起こすことで相手がどのように認識するのか”といった、自己と他者の心情を正確に理解する必要がある。つまり、嘘をつくうえで“他者”の存在は重要となるのである。本研究では、嘘をつき始めるとされる幼児期を対象とし、幼児の嘘に対して、他者の存在や心情理解がどのように影響を及ぼすのかを検討する

ことを目的とする。

そもそも、子どもはいつ頃から嘘をつくことが可能なのだろうか。Lewis, Stanger, & Sullivan (1989) は、3歳児を対象に、おもちゃを見てはいけないと約束したにもかかわらずおもちゃを見てしまった幼児が、おもちゃを見たかどうかを実験者から問われた際に嘘をつくかどうかを検討した。その結果、全体の38%が“見ていない”と嘘をついた。この結果から、Lewis et al. (1989) は3歳頃から嘘をつくことが可能であると示唆している。

しかし既述したように、嘘をつく上で重要となるのは、自己と他者の心情を正確に把握している状態で嘘をついているのかという点である。このような自己や他者の心情を理解し、自分とは異なる他者の誤った考えや行動を推測する能力は一般的に、心の理論と呼ばれており (e.g., Premack & Woodruff, 1978), これまで嘘と心の理論 (誤信念) との関連に関しては数多く検討されてきた (Chandler, Fritz, & Hala, 1989; Hala, Chandler, & Fritz, 1991; 林, 2002; 菊野, 2008; Sodian, Taylor, Harries, & Perner, 1991; 瓜生, 2007)。例えば、Chandler et al. (1989) は、Hide and Seek という課題を用いて、人形の足跡を操作することで、宝物がある場所を隠して他者を欺くという実験を行った。その結果、2歳児後半であっても、宝を隠した場所までの足跡を消す、別の場所に足跡を付けるといった、他者を意図的に欺くための行動手段を行うことが可能であることを示唆している。これにより、幼児は3歳児までには、自己と他者の心情が異なっており、自己の知っている事実とは相反する情報を与えることで、他者に誤った信念を抱かせる (別の場所に足跡を付けることでその場所に宝があると思込ませる) ことが可能であることを理解していると考えられる。

他方、上記のような誤信念を操作した上での他者理解の検討以外にも、自分の行動が他者に見られているといった他者認識による心情理解の観点から嘘をつく行為を検討した研究もある。杉村・古野・平木 (1998) は Lewis et al. (1989) で用いられた嘘課題において、他者から見られているという他者認識が幼児の嘘をつく行為に及ぼす影響について検討した。杉村他 (1998) は、Lewis et al. (1989) の実験内容 (統制条件) に加え、実験者不在の際でも自分の行動が見られていると認識させるために、先生条件 (カメラで担任の先生が見ている) とぬいぐるみ条件 (ぬいぐるみが自分のことを見ている) を設けて検討した。その結果、統制条件に比べて、先生条件やぬいぐるみ条件において嘘をつく幼児の割合が減少した。このことから、杉村他 (1998) は、自分の行動が他者に見られているという認識が、嘘をつくという行動を抑制させる要因となることを指摘しており、3歳頃には既に、ある事実を知っている相手に対して事実とは反する言動を示しても、誤った信念を与えることは不可能であることを理解していると示唆している。しかし、杉村他 (1998) では、他者に見られているという条件の幼児であっても、年少児で55%、年中児に至っては70%の幼児が嘘をついていた。そのため、幼児の嘘をつく行為と他者認識による他者信念理解とは直接的に関連しあっていない可能性も考えられる。

功刀・松澤・森山 (2003) は杉村他 (1998) の実験内容に“自己制御”の観点を踏まえ再検討を行った。功刀他 (2003) は、おもちゃを見てしまうことで生じる罰を避けるために、そもそも“おもちゃを見る”という行動自体を行わないという自己制御行動に他者認識が影響を及ぼしているとは仮定して実験を行った。杉村他 (1998) 同様、統制条件と先生条件を踏まえて検討した結果、年齢

に関係なく先生条件において自己制御行動が多く示された一方で、嘘をつく行動においては、条件に関係なく嘘をつく割合が高かった。このことから、功刀他（2003）は、他者認識は自己制御行動に影響を及ぼすものの、嘘をつく行為に関しては、他者信念を理解した上での嘘は困難であり、純粋に他者からの罰を避ける目的として嘘をついている可能性を示唆している。

しかし、杉村他（1998）や功刀他（2003）では、実際に他者が見ているという状況設定で検討は行っているが、幼児の心の理論獲得過程と照らし合わせた上での検討は行われていない。Polk & Harris（1989）は Lewis et al.（1989）で用いられた嘘課題と誤信念課題との関連を検討した結果、嘘をつく行為と誤信念課題の成績が関連していることを示しており、他者の信念を把握して、操作することで嘘行為が発達すると示唆している。この見解は功刀他（2003）の結果とは異なっているが、もし心の理論の獲得状態を踏まえたうえで検討を行えば、功刀他（2003）において示されなかった嘘をつく行為と他者認識との関連性がより明確となるかもしれない。つまり、功刀他（2003）が指摘するように、従来、大人であれば他者から見られていると認識している際には嘘をつくことはなく、それ以前に自己の行動を監視されているため、まずおもちゃを見るという行為自体行わないと考えられる。一方で、他者から見られていない場合であれば、約束をしていたとしても嘘をつくことで相手に間違えた信念を抱かせることが可能であることを知っているため、嘘をつくという選択肢が生まれるだろう。しかしこのように、状況や自己と他者の心情を正確に把握したうえで嘘をつくためには、かなり高度な能力が必要であるため、単純に他者から見られているという場面設定のみで検討することは困難であると考えられる。そのため、心の理論を獲得しているかどうかを踏まえたうえで、他者から見られているといった他者認識の状況設定が、幼児の箱をのぞく行為から嘘をつく行為に至るまでの一連の行動過程において、どのように影響しているのかを、総合的に検討する必要がある。

以上を踏まえ、本研究では、杉村他（1998）や功刀他（2003）の実験を基盤としたうえで、他者認識と心の理論の獲得が、嘘をつく行為を含めた一連の行動過程においてどのように影響を及ぼすのかを検討することを目的とする。なお、本研究で検討する嘘に関しては、Lewis et al.（1989）や功刀他（2003）で検討されているような、約束をしたにもかかわらず、それを破ってしまった際につく嘘に焦点を当てることとし、このような嘘に対して、近藤・浅田・水口・杉村（2011）は他者からの叱責を回避するための嘘であるとして“自己防衛的嘘”と命名していることから、本稿においても以下“自己防衛的嘘”と明記することとする。

方法

参加児

年少児 35 名（平均年齢：3 歳 8 か月、範囲：3 歳 2 か月～4 歳 2 か月）、年中児 35 名（平均年齢：4 歳 8 か月、範囲：4 歳 3 か月～5 歳 2 か月）、年長児 38 名（平均年齢：5 歳 8 か月、範囲：5 歳 3 か月～6 歳 2 か月）の合計 108 名を対象とした。各条件の人数は、カメラ有り条件が、年少児 17 名、年中児 17 名、年長児 18 名、カメラ無し条件が、年少児 18 名、年中児 18 名、年長児 20 名であった。

手続き

実験は個別に実施した。実施した課題は、嘘課題と、心の理論を測定する誤信念課題とスマーティ課題の3課題であった。なお、嘘課題と心の理論課題はそれぞれ別の実験者が実施した。嘘課題に関しては、実験の様子をビデオカメラで撮影した。実施時間は一人当たり、約20分程度であった。

自己防衛的嘘課題 自己防衛的嘘課題（以下、嘘課題）は、自己防衛的嘘を測定する課題として使用頻度が高く、日常生活の場面においても不自然な状況設定ではない Temptation Resistance Paradigm (e.g., Talwar & Lee, 2008) を参考にするとともに、Lewis et al. (1989) や功刀他 (2003) で用いられた内容となるべく符合するように作成した。嘘課題で用いた材料は、左右に1つずつと前方に1つの計3つののぞき穴が空いている、上部開閉可能な長方形型の箱（縦24cm×横15cm×高さ13cm、青い箱と赤い箱を用意した）を1箱、5種類のキャラクター人形（ピカチュウ、アンパンマン、ドラえもん、ミッキーマウス、くまのプーさん）およびそれに対応するヒントを記入した用紙1枚、ビデオカメラ1台、ストップウォッチ1個であった。ビデオカメラは、カメラ有り条件では三脚の上に固定して、参加児が確認可能な位置に設置し、カメラ無し条件では、三脚は使用せず、参加児に見つからないよう、目立ちにくい場所に設置した。ゲーム中に使用した、キャラクターを当てるためのヒント項目に関しては、各キャラクターにおいて3つのヒントを作成した。ヒント作成の基準として、1つ目に提示するヒントは全てのキャラクターで同一とし、そのみでは中身を特定することが不可能な内容とした（“この中にはお人形さんが入っています”）。箱の中に入れるキャラクターは実験者がランダムに割り当てた。

実施前、実験者は箱の中に人形を1つ入れて蓋を閉め、実験室の机の下に隠しておいた。その後、参加児には「一緒にあてっこゲームをしよう。」と部屋に誘導した。入室後、参加児を机の前に座らせ、使用する箱を提示しながら箱の説明を行った。その後、「箱にある穴をのぞいてもいいし、箱のふたを開けてみてもいいよ。」と教示して参加児に箱の仕組みを理解させると共に、事前に入れておいた人形が何であるのかを確認させ、ゲームの趣旨を理解させた。事前に入れておいたキャラクターを用いて練習試行を行った後、参加児がゲームの内容を理解したことを確認して本試行へと移行した。その際、練習では実際にのぞいて箱の中身を確認したが、本試行では、中のはのぞかず、実験者が提示するキャラクターに関するヒントを聞いて中身を当てるように教示した。その後、人形を別のものに入れ替え、蓋を閉めて再び参加児の前に提示した。そして、「今から、ヒントを3つ言うから、それを聞いて何が入っているかをあてっこしてね。」と教示を行った後、参加児に「ごめん。ヒントを言う紙を向こうのお部屋に置いてきちゃったみたい。今から取ってくるから、ここで待っててね。お兄ちゃん（お姉ちゃん）が戻ってくるまで、この箱の中身のはのぞかないでね。」と教示し、参加児が状況を理解し、約束の意思があることを確認して、実験者は退出した。その際、カメラ有り条件に関しては、上記内容に含め「お兄ちゃん（お姉ちゃん）がいない間も、〇〇ちゃんのことをあのカメラで見ているからね。」という教示を追加した。

実験者は、部屋を退室後ストップウォッチで2分間経過したことを確認して、再び入室した。入室後、実験者は参加児に、「お待たせ。ヒントの紙があったよ。お兄ちゃん（お姉ちゃん）がいない間、箱の中のはのぞかなかった？」と尋ね、のぞいていないと反応した参加児に対しては、再度「本

当に？」と確認し、ゲームを続行した。なお、のぞいたと反応した参加児に対しては、中身を別の人形に入れ換えてゲームを行った。

誤信念課題 (Wimmer & Perner, 1983 の課題を用いた小川・子安, 2008 を一部修正) ウサギとネコの人形 1 体ずつと、ビー玉 1 つ、コップ 2 つ、布 2 枚を使用した。布はコップの口を覆うように置かれ、コップの中が見えない状態にした。実験者は参加児の前に実験用具を設置し、人形等を操作しながら、口頭で物語を説明した。課題は、ネコとウサギがビー玉で遊んでいる途中、ウサギが母親に呼ばれ、席を外す際にビー玉を一方のコップの中に入れてしまうが、ウサギがいない間に、ネコがもう一方のコップにビー玉を移し替えてしまうという内容であった。実演後、まず他者信念質問として「ウサギさんはまたビー玉で遊びたいなと思っています。ウサギさんははじめにどこを探しますか。」と尋ねた。その後、統制質問として、現実質問と記憶質問を行った。現実質問では「ビー玉は今どこにありますか。」と尋ね、記憶質問では「ウサギさんはお母さんのところに行くときにビー玉をどこに入れましたか。」と尋ねた。

スマーティ課題 (Hogrefe, Wimmer, & Perner, 1986 の課題を用いた小川・子安, 2008 を一部修正) お菓子が入っていた空の箱 2 種類を 1 箱ずつと、ボールペン数本、ウサギの人形 1 体を使用した。お菓子の箱の中には、あらかじめボールペンを入れておき、中身が外から見えないように蓋を閉めておいた。実験者はお菓子の箱を参加児に見せ、箱の中には何が入っていると思うかを質問した。反応が見られない参加児に対しては、他の種類のお菓子の箱に変えるか、これはお菓子の箱であるという説明を行った。参加児が理解できたことを確認した後、箱の中身を見せ、本当はお菓子ではなくボールペンが入っていることを説明した。その後、まず、自己信念質問として「初めに箱を見たとき〇〇くん(ちゃん)は何が入っていると思いましたか。」と尋ねた。その後、ウサギを提示させ、他者信念質問として「ウサギさんはお外に遊びに行っていて箱の中身を知りません。ウサギさんはこの箱を見たら中に何が入っていると思いますか。」と尋ね、最後に、統制質問として「この箱の中には本当は何が入っていますか。」という現実問題を行った。

結果

箱をのぞく行為

まず、カメラの有無が幼児の箱をのぞく行為に及ぼす影響について分析を行った。ビデオ録画を基に、実験者不在の 2 分間において、箱の蓋を開ける、あるいは、のぞき穴をのぞいて中身を確認した参加児を“のぞく”，中身を確認しなかった参加児を“のぞかない”に分類した。なお、参加児の行為の分類に関しては、主に第 1 著者が行ったが、分類困難と判断した参加児の行為に関しては第 2 著者との協議の上、決定した。箱をのぞいた参加児の割合を Table 1 に示した。

のぞいた参加児に対して、2 (カメラ：有，無) × 3 (年齢：年少児，年中児，年長児) の逆正弦変換法による分散分析を行った結果、カメラの主効果 ($\chi^2 = 7.96, df = 1, p < .01$) のみ有意であった。

Table 1 年齢とカメラの有無別の箱をのぞいた幼児の割合 (%)

	カメラ有り	カメラ無し
年少児	29.4 (5 / 17)	44.4 (8 / 18)
年中児	41.1 (7 / 17)	50.0 (9 / 18)
年長児	16.7 (3 / 18)	70.0 (14 / 20)

心の理論と自己防衛的嘘の関連

次に、カメラの有無と心の理論獲得が幼児の自己防衛的嘘に及ぼす影響について分析を行った。参加児が心の理論を獲得しているかについては、誤信念課題とスマーティ課題の2課題を基準に分類を行った。その際、心の理論を獲得している基準として、2課題の内、どちらか一方の課題において、他者信念質問、現実質問、記憶質問（スマーティ課題では自己信念質問）の3つの質問すべてに正答した場合に、獲得済みと判断した。“のぞく”と分類された参加児のうち、その後の実験者の質問に対してのぞいていないと反応（あるいは非言語的にのぞいていないと反応）した参加児を“嘘をつく”，のぞいたと告白した参加児を“告白する”に分類した。結果を Table 2 に示した。2（カメラ：有，無）×2（心の理論：獲得，未獲得）×2（行為：嘘をつく，告白する）の対数線形モデル分析を行った結果，カメラおよび心の理論と自己防衛的嘘行為において，条件付き独立モデルのあてはまりが良好であった ($G^2=0.048, df=1, p=.826$)。カメラ有り群では，嘘をつく参加児は告白する参加児よりも相対的に多く（嘘をつく： $z=1.87$ ，告白する： $z=-1.87$ ），カメラ無し群では，告白する参加児が嘘をつく参加児よりも相対的に多かった（嘘をつく： $z=-1.87$ ，告白する： $z=1.87$ ）。また，心の理論獲得群では，嘘をつく参加児が告白する参加児よりも相対的に多く（嘘をつく： $z=1.70$ ，告白する： $z=-1.70$ ），心の理論未獲得群では，告白する参加児が嘘をつく参加児よりも相対的に多かった（嘘をつく： $z=-1.70$ ，告白する： $z=1.70$ ）。

Table 2 のぞいた幼児のカメラの有無と心の理論獲得別の割合 (%)

	カメラ有り		カメラ無し	
	獲得 $n=2$	未獲得 $n=13$	獲得 $n=11$	未獲得 $n=20$
嘘をつく	100.0	92.3	90.9	60.0
告白する	0.0	7.7	9.1	40.0

他者認識と心の理論別の子どもの反応

最後に、カメラの有無と心の理論獲得が、箱をのぞく行為から自己防衛的嘘をつくまでの幼児の行動過程に及ぼす影響について分析を行った。カメラの有無と心の理論獲得別に，“のぞかない”，“嘘をつく”，“告白する”の参加児の割合を Table 3 に示した。

まず，カメラの有無と心の理論獲得別に，参加児の行動間に人数の偏りがみられるかを検討するために χ^2 検定を行った結果，人数の偏りが有意であった ($\chi^2=17.90, df=6, p<.01$)。残差分析を行っ

た結果、カメラ有り・心の理論獲得群において、のぞかない参加児が有意に多かった ($z=2.47$)。また、カメラ無し・心の理論未獲得群において、のぞかない参加児が有意に少なく ($z=-2.12$)、告白する参加児が有意に多かった ($z=3.38$)。

Table 3 カメラの有無と心の理論獲得別の幼児の割合 (%)

	カメラ有り		カメラ無し	
	獲得 <i>n</i> =15	未獲得 <i>n</i> =37	獲得 <i>n</i> =21	未獲得 <i>n</i> =35
のぞかない	86.7	64.9	47.6	42.9
嘘をつく	13.3	32.4	47.6	34.3
告白する	0.0	2.7	4.8	22.9

また、年齢別に同様の分析を行った結果、年少児、年中児においては、人数の偏りは有意ではなかったが (それぞれ、 $\chi^2=0.00, df=6, ns$, $\chi^2=8.73, df=6, ns$)、年長児においては人数の偏りが有意であった ($\chi^2=19.83, df=6, p<.01$)。年齢別の結果を Table 4-1~4-3 にそれぞれ示した。年長児において、残差分析を行った結果、カメラ有り・心の理論獲得群において、のぞかない参加児が有意に多く ($z=3.07$)、嘘をつく参加児が有意に少なかった ($z=-2.67$)。また、カメラ無し・心の理論獲得群において、嘘をつく参加児が有意に多かった ($z=2.01$)。また、カメラ無し・心の理論未獲得群において、のぞかない参加児が有意に少なく ($z=-2.41$)、告白する参加児が有意に多かった ($z=3.06$)。

Table 4-1 カメラの有無と心の理論獲得別の年少児の割合 (%)

	カメラ有り		カメラ無し	
	獲得 <i>n</i> =0	未獲得 <i>n</i> =17	獲得 <i>n</i> =3	未獲得 <i>n</i> =15
のぞかない	0.0	70.6	33.3	60.0
嘘をつく	0.0	23.5	33.3	26.7
告白する	0.0	5.9	33.3	13.3

Table 4-2 カメラの有無と心の理論獲得別の年中児の割合 (%)

	カメラ有り		カメラ無し	
	獲得 <i>n</i> =3	未獲得 <i>n</i> =14	獲得 <i>n</i> =5	未獲得 <i>n</i> =13
のぞかない	66.7	57.1	80.0	38.5
嘘をつく	33.3	42.9	20.0	30.8
告白する	0.0	0.0	0.0	30.8

Table 4-3 カメラの有無と心の理論獲得別の年長児の割合 (%)

	カメラ有り		カメラ無し	
	獲得 <i>n</i> =12	未獲得 <i>n</i> =6	獲得 <i>n</i> =13	未獲得 <i>n</i> =7
のぞかない	91.7	66.7	38.5	14.3
嘘をつく	8.3	33.3	61.5	57.1
告白する	0.0	0.0	0.0	28.6

考察

本研究では、他者認識と心の理論獲得が幼児の自己防衛的嘘を含む一連の行動過程に及ぼす影響について検討を行った。以下、結果に準じて考察を行う。

まず箱をのぞく行為に関しては、年齢に関係なく、カメラ無し条件の方が、カメラ有り条件よりも箱をのぞく幼児の割合が高かった。つまり、カメラの存在によって、他者から見られているという認識が生じ、結果、カメラ有り条件での幼児の箱をのぞくという行動が抑制されたと推測され、功刀他（2003）と一致する結果であった。これにより、“他者に自分の行動が見られている”という他者認識は年幼児頃から既に芽生えており、嘘をつく行為にではなく、その前段階である自己制御行動に影響を及ぼしていることが示された。しかし、功刀他（2003）では、年齢が上がるにつれて、自己制御行動を行う幼児が減少しており、全体として自己制御行動を行った幼児が、年少児では67%だったのに対して、年長児においては35%であった。一方で本研究では、カメラの有無に関係なく、全体的に“箱の中をのぞかない”という行動判断を行った幼児が多くみられ、年齢別においても差は見られなかった。この要因に関して、ビデオ録画から、箱をのぞかなかった幼児の反応を検証してみると、実験者が再び入室した際に「早くゲームがしたい」や、「中を見ないで待っていたよ。ヒントの紙は持ってきた？」のような、ゲーム続行を切望する反応を示した幼児が見られた。つまり、幼児が箱をのぞかなかった理由として、純粋に実験者とのゲームを楽しみたいという、快楽的満足感を得るために“のぞかない”という行動判断を行った可能性も考えられるのである。

次に、自己防衛的嘘と心の理論獲得に関しては、心の理論を獲得した幼児の方が未獲得の幼児に比べて、自己防衛的嘘をつく傾向が多く見られた。この結果は、先行研究とも一致しており（e.g., Hala et al., 1991）、自己防衛的嘘の行為に心の理論の獲得が関連していることが明らかとなった。一方で、幼児は自己がついた嘘を意図的に持続させることはほとんどで不可能であった。本研究では、キャラクターを当てるヒントにおいて、最初のヒントは「この中にはお人形が入っています。」であり、決して中身を特定することが出来ない内容であった。しかし、“箱の中をのぞいていない”と嘘をついた幼児のほとんどが、1つ目のヒントにおいて中身を回答してしまった。つまり、幼児は心の理論を獲得することで、他者に嘘をつけば大丈夫という認識を抱くことは可能になりながらも、その嘘を時系列的に維持させることは困難であることが推測される。この観点に関して、Talwar & Lee（2002）は嘘をついた幼児が、その後の発話内容を一貫させることができるかどうか、つまり、覗いていないと嘘をついた幼児に、その後、中身に関する質問を尋ねた場合、知らないふりが

出来るかどうか、について検討を行った。その結果、8歳以下の子どもはその場で嘘をつくことは可能でありながらも、言語的にその後の嘘の持続を行うことは困難であったことから、これらの能力には二次的信念が深く関連している可能性を指摘している。今回実施した心の理論課題が一次信念に関する課題であったことや、日本の幼児は他国の幼児に比べて心の理論の獲得が遅いことを踏まえると（例えば、瓜生，2007）、一次信念がようやく獲得された段階であった幼児にとって、中をのぞいてしまったという事実のみを隠すことだけに意識が集中し、1つ目のヒントで解答することの意味を正確に把握することは困難であったと推測される。

最後に、カメラの有無と心の理論の獲得が、一連の行動過程に及ぼす影響に関して、心の理論を獲得しているならば、他者から見られている場合は“箱をのぞかない”一方で、他者から見られていない場合には“嘘をつく”といった、大人と同様の行動を示す可能性が考えられた。分析の結果、この傾向と一致する行動が示されたのは年長児においてのみであった。このことから、状況を正確に把握したうえで自己防衛的嘘の成功性を含めた、一連の正確な行動判断を行うためには、心の理論の獲得以外の要因が影響している可能性が考えられる。これまでの研究において、嘘をつく行為自体は3歳児頃から可能である一方で、他者の心情等を正確に理解した上で嘘をつくことは4歳児以降でなければ困難であることが示唆されている（e.g., Sodian et al., 1991）。幼児期における心情把握を踏まえた嘘行為の発現時期に関しては異なった見解があるものの（e.g., Chandler et al., 1989; Sodian et al., 1991）、本研究において年長児（平均年齢：5歳8か月）のみが一連の正確な行動を行えたことを踏まえると、最初は外的罰からの回避のみが目的であった嘘が、成長に伴い、様々な状況で嘘をつく、あるいは、嘘をつかれるといった経験を繰り返すことで、他者の心情を踏まえての嘘へと変容していくのではないだろうか。つまり、心の理論獲得によって、自己と他者の心情を理解することが可能となると共に、それを必要とする様々な状況での経験値を蓄積することによって、大人同様に、他者認識が存在する場合においては“のぞかない”行動判断を下し、他者認識が存在しない場合には“嘘をつく”という行動判断を下すといった異なった判断を行えるようになるのではないかと考えられるのである。

最後に今後の課題を述べる。本研究では、功刀他（2003）の追実験を行うと共に、心の理論の獲得を踏まえて、より詳細に幼児の自己防衛的嘘の行為に関して検討を行った。しかし、既述の通り、本研究では“箱の中身をのぞかない”幼児が多く存在しており、この要因として、ゲームを行うために約束を守ろうという約束規範意識の影響の可能性を提示した。そのため、今後は、幼児が約束を守るという行為や約束を破る行為に対してどのように認識しているのかといった、社会的・道徳的発達の側面を同時に検討していき、その上で自己防衛的嘘との関連を明らかにする必要がある。

引用文献

- Chandler M., Fritz A., S., & Hala, S. (1989). Small-scale deceit: deception as a marker of two-, three-, and four-year-olds' early theories of mind. *Child Development*, **60**, 1263-1277.
- Hala, S., Chandler, M., & Fritz, J. H. (1991). Fledgling theories of mind: Deception as a marker of 3-years-old's understanding of false belief. *Child Development*, **61**, 83 - 97.

- 林 創 (2002). 児童期における再帰的な心的状態の理解 教育心理学研究, **50**, 43 - 53.
- Hogrefe, G. J., Wimmer, H., & Perner, J. (1986). Ignorance versus false belief: A developmental lag in attribution of epistemic states. *Child Development*, **57**, 567-582.
- 菊野春雄 (2008). 幼児の嘘と心の理論の発達: 心の理論に基づく仕草は4歳で変化するのか? 大阪樟蔭女子大学人間科学研究紀要, **7**, 121-129.
- 近藤 綾・浅田英恵・水口啓吾・杉村伸一郎 (2011). 幼児の思いやりの嘘と実行機能との関連 幼年教育研究年報, **33**, 41-48.
- 功刀弘子・松澤正子・森山 徹 (2003). 他者意識が自己制御と嘘つき行動に及ぼす影響 昭和女子大学生活心理研究所紀要, **6**, 61 - 66.
- Lewis, M., Stanger, C., & Sullivan, M. W. (1989). Deception in 3-years-olds. *Developmental Psychology*, **25**, 439 - 443.
- 小川絢子・子安増生 (2008). 幼児における心の理論と実行機能の関連性: ワーキングメモリと葛藤抑制を中心に 発達心理学研究, **19**, 171-182.
- Polak, A., & Harris, P. L. (1999). Deception by young children following noncompliance. *Developmental Psychology*, **35**, 561-568.
- Premack, J., & Woodruff, G. (1978). Does the chimpanzee have a theory of mind? *The Behavioral and Brain Science*, **1**, 515-526.
- Sodian, B., Taylor, C., Harries, P. L., & Perner, J. (1991). Early deception and the child's theory of mind: False trails and genuine markers. *Child Development*, **62**, 468 - 483.
- 杉村智子・古野美和子・平木文子 (1998). 幼児の嘘つき行動に及ぼす他者認識の影響 福岡大学紀要, **47**, 183-189.
- Talwar, V., & Lee, K. (2002). Development of lying to conceal a transgression: Children's control of expressive behavior during verbal deception. *International Journal of Behavioral Development*, **26**, 436-444.
- Talwar, V., & Lee, K. (2008). Social and cognitive correlates of children's lying behavior. *Child Development*, **79**, 866-881.
- 瓜生淑子 (2007). 嘘を求められる場面での幼児の反応: 誤信念課題との比較から 発達心理学研究, **18**, 13-24.
- Wimmer, H., & Perner, J. (1983). Beliefs about beliefs: Representation and constraining function of wrong beliefs in young children's understanding of deception. *Cognition*, **13**, 103-128.

謝辞

実験実施にあたり、快く承諾していただきました、保育園の園長先生をはじめ、諸先生方、ならびに、実験に協力していただいた園児の皆さんに心より感謝致します。